川柳　上卷

近世文藝叢書　川柳　第八

近世文藝叢書 第八

明治四十四年三月廿五日印刷
明治四十四年三月三十日發行

（近世文藝叢書第八奥附）

非賣品

編輯兼發行者　東京市京橋區新榮町五丁目三番地
國書刊行會代表者　早川純三郎

印刷者　東京市京橋區新榮町四丁目三番地
高橋赤次郎

印刷所　東京市京橋區新榮町四丁目三番地
國書刊行會第一工場

近世文藝叢書第八　川柳一

緒言

文政年間小石川養生所の肝煎なりし小川又右衞門顯道は、もと醫家なれど政道にも用意ありし者なり。其隨筆『塵塚談』において川柳點の狂句を論じて曰く、俳諧に六玉川、前句附に柳樽といふ雙紙あり。人の擧動、心のよしあし、尊卑の人情、上下の人心の有樣、其外世の中の事情をざれ句にいへるもの也。されどなぞの類に似たる事ありて、早速は解しがたき事多くあり。奉行頭人は人の邪正、事變人情を辨知する事專務なれば、此の雙紙の句どもすら〳〵と解す人をよしとすべし云々と云へりしは、能く其の當時の奉行頭人の情弊を察したる言といふべし。今も猶、裁判官警察官などの中に、まれまれには世情人情に疎く、たゞむなしく法文になづみて苛酷に失す

るやうの憾なしとはいふべからず。事態は文政文化の頃といたく變りたれど、人情はさして異なることなし。人事詩など立派なる稱を得て、今日盛んに川柳點風の狂句の行なはるゝは、なまじいの俳句倒れよりは、興ありてまた益ありといふべし。左れど此の狂句も、下女と居候を當の敵としてより卑猥に傾むき、穿ちと隱し題に凝りては誠に謎のごとくまたあて物のごとくなり、有のまゝ過ぎては言葉をなさぬ程に下りたるは慨くべき事にて、柳樽も初代川柳點の頃は、居候を詠みても「物にかゝりが篳篥の稽古する」抔と上品なり。父兄の勘當をうけて他家によるを、掛り人または物にかゝりといひしにて、篳篥を吹くなど僭上の體、其人物を顯して、父兄も勘當すべく、またこれを同居さする者の迷惑の情も察せられたり。これが居候と改名すると共に、同居人を侮辱すること其極に達し、下女と居候より、狂句を見ること仇敵の如くなりしは、をかしくもま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

た氣の毒の事なり。又バレ句あるひは大尾と唱へて、只管をかしき事を云はんと爭ひて猥雜を極めたるは此道の外道惡魔にて、それが爲に川柳點の品位を墜し、狂句など士君子のもてあつかふ者に非ずとまで斥けられたり。これらの弊を刈り除き、川柳點の旨とする、人情の微、世態の細を穿ち、今の世の養生所施藥院の肝煎たる小川顯道其人のごとき具眼者に玩味せられたきものなり。元祿寶永前句付盛んの頃「傾城にするとて親は産み付ず」といふ付句は、どの宗匠も一度ははめられしとか。「孝行のしたい時分に親はなし」などは、子養はんとすれば親いまさずの古語其まゝの如くなれど、したい時分といふに無量の妙味あり。前句によらぬ一句立の狂句は、人人平常心におもひて、いまだ云出さゞるところをとらへて、其まゝにいふが手柄なり。小川顯道はすら〳〵と解す人と云ひしが、其の當時にありては、世情に通じたる者には、すら〳〵とも解されしな

らんが、今にして柳樽を讀みては、なか〳〵すら〳〵ごころにあらず、特に明治前後の隔ての關門、守り嚴しく、手形免狀鷄のそら音、左樣な事にて通り難し。我等も二十餘年のむかし、大久保紫香氏のもとに會し、一人一枚通解し得る者は功の座に直して酒盛る事をして遊びしが、なか〳〵難關苦戰にて、果は曲解のみ多くして、一人半枚に願ひ下げたることもありけり。傳へていふ「天人が小田原町をのぞいて居」といふ句を宗匠解しかね、一夜考へ通しても考へ得ず、我も立机して判者たるに、此句が分からぬとありては面目なし。此上は神佛の利生によらんものと、淺草の觀世音に參詣し、祈念をこめて立歸らんとして、不圖上を仰ぎ見てハタと手を打ち、これ目前の御利生と悅びしとか。作り事なるや知らねど、まことに手近さうに見えて、偖判じかねる句のなか〳〵に多し。これを解し得て興味あるのみならず、江戸の風俗を曉り知る事につきて大に益あり。此

の川柳には木卯の名を以て判者の側にも立ちし柳亭種彦は、古俳諧に依て慶長より元祿頃の風俗を研究したるが、今は柳樽によりて寶暦天明より文政文化度の江戸の風俗を研究考證すべし。たしかに研究考證の一科目ともすべき價あるものなり。

此篇柳樽初篇より六十篇までを集め、これを分ちて二冊となしぬ。甚しく卑猥なる句を削り去り、落丁また板本磨滅のところは異本を以て補へり。これが校訂につき岡田法學博士和田文學士の藏本を借覽して大に益を得たれば、こゝに附記して謝意を表す。

明治四十四年二月　　饗庭篁村識

初代川柳肖像

（原本二十四篇所載）

近世文藝叢書第八

川柳一

俳風柳多留初篇

序

さみだれのつれ〴〵に、あそこの隅こゝの棚より、ふるとしの前句附のすりものをさがし出し、机のうへに詠むる折ふし、書肆何某來りて此儘に反古になさんも本意なしといへるにまかせ、一句にて句意のわかり安きを擧げて一帖となしぬ、なかんづく當世俳風の餘情をむすべる秀吟等あれば、いもせ川柳樽と題す、

于時明和二酉仲夏　淺下の麓吳陵軒可有述

五番目は同じ作でも江戸產れ
かみなりをまねて腹掛やつとさせ
上るたびいつかごしめて來る女房
古郷へ廻る六部は氣のよわり
ひよ〳〵の內は亭主にねだりよい
伴頭は內の羽白をしめたがり
鍋いかけすてつぺんからたばこにし
人をみなめくらにごせの行水し
米つきに所を聞けば汗をふき
すつぽんに拜まれた夜のあたゝかさ
齋日の連れは大かた湯屋で出來
入髮でいけしやあ〳〵と仲の町
百兩をほどけば人をしさらせる
じれつたく師走を遊ぶ針とがめ
九郎介へ代句だらけの繪馬を上げ
使者はまづ馬からおりて鼻をかみ
梅若の地代は宵にさだまらず
なげ入の干からびて居る間の宿
かる石も一つまぢつて義をたてる
法げんのすゝめで四本木をうへる

祐つねは椿の花のさかりなり
岡場所で禿といへば逃て行く
雀形たゝいて雪のちうしんし
日本勢一人りは伽羅の目利もし
脇差をもどせば茶屋はかのを出し
寒念佛鬼で目をつく切り回向
大つゞみ茶食の胴をぶつ潰し
町内の佛とらへて猿田彦
はねむしる鴨に手の込む長局
つまむ程道陸神に箔を置き
おはぐろをつけ〳〵禿にらみつけ
今以て浪津の燒物すめかねる
四郎兵衞もひやうひやく交り暇乞
なんの手か知れぬ夜更の硯ぶた
佐渡の山けんしの前でぶらつかせ
紙花もしばしの内の金まわし
上下で歸る大工はとりまかれ
前だれで手をふく下女の取廻し
跡乘の馬は尾ばかりふつて居る
疝氣をも風にして置く女形

ぬり桶はいつち化よい姿なり
寒念佛みり〳〵とあるくなり
衣類迄まめで居るかと母の文
向ふから硯を遣ふ懸り人
まよい子のおのが太鼓で尋られ
脉所を見せてたて板申すやう
上下を着て文盲な酒をのみ
半兵衞雛の頃から心がけ
喰つみがこしやくに出來て一分めき
捨子じやと坊主禿をなで廻し
藪入をなまものじりにしてかへし
流星の内に座頭はめしにする
禿よくあぶない事を言はぬなり
客分といはるゝ女立のまゝ
くわいらいし十里程來た立すがた
鷄の何か言ひたひ足づかい
杖つきの醉はれた所は盛直し
婚禮を笑つて延ばす使者を立
すつぽんをりやうれば母は舞をまい
むく鳥が來ては格子をあつがらせ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ふり袖は言ひそこないの蓋に成り
せめて色なれば訴訟もしよけれど
よし町へ羽織を着ては派が利かず
壁のすさむしりながらの實ばなし
國の母生れた文を抱あるき
鹽引の切殘されて長閑なり
江戸者でなけりやお玉が痛がらず
お袋をおどす道具は遠い國
菅笠で犬にも旅のいとまごい
めし焚に婆を置て鼻あかせ
うしろから追はれるやうな榊がき
正直にすりや橙は乳母へ行
護國寺を素通りにする風車
雪見とはあまり利口の沙汰でなし
寒念佛千住のふみをことづかる
松原の茶屋はいぶるが景になり
ぼた餅を氣の毒そうに替て喰ひ
落て行く二人が二人帶がなし
親分と見えてへッつい惣かな具
日傘さしてをつとの内へ行き

縫紋を乳をのみ〳〵むしるなり
藪入りにうすく一きれ振廻れ
根ぞろへの横にねぢれて口をき丶
庵の戸へ尋ねましたと書て置
隅ッこへ來ては禿の腹を立て
小座頭の三味線ぐるみ邪魔がられ
舌打ちで振廻水の禮はすみ
義貞の勢はあさりをふみつぶし
だい〳〵は年神さまの疝氣所
合羽箱どろ〳〵〳〵とかしこまり
定宿を名乘てひどい塲をのがれ
井戸がへに大屋と見へて高足駄
立臼に天狗の家をきりたをし
禪寺はひがんの錢にふりむかず
おそがれに出て行く男尻知らず
隣から戸をた丶かれる新世帶
うりものと書て木馬の面ラへ張り
むかしから湯殿は智惠の出ぬ所
神代にもだます工面は酒が入り
盃にほこりのたまる不得心

跡月をやらねば路次もたゝかれず
指の無い尼を笑へば笑ふのみ
鉢卷も頭痛の時は哀れなり
ぼた餅の精進落はいのこ也
穴ぐらで物いふやうな綿ぼうし
急度して出る八朔は寒く見え
三神はなぶるとよみし御すがた
頂いて受けべき菓子を手妻にし
緋の衣着れば浮世かおしくなり
太神樂ばかりを入れて門を締め
附木突腰におどけた拍子あり
馬かたが居ぬと子供が藝をさせ
水がねでむねのくもりをといで置
袴着にや鼻の下迄さつぱりし
習ふよりすてる姿に骨を折り
無いやつの癖にそなへをでつかくし
國ばなしつきれば猫の蚤をとり
藪入りの綿着る時の手の多さ
武さし坊とかく支度に手間がとれ
勘當も初手は手代に送られる

五六寸かきたてゝ行くねずの番
新田を手に入れて立つ馬喰町
どこぞではあぶなき娘ゆふべ遣り
仕切場へ暑い寒いの御挨拶
鞠場からりつぱな形でひだるがり
初ものが來ると持佛がちんと鳴り
こわそうに鰯の升を持つ女
唐紙へ母の異見をたてつける
すてる藝はじめる藝にうらやまれ
新發意はたれにも帶をして貰ひ
内にかと言へばきのふの手を合せ
美しひ上にも欲をたしなみて
四五人の親とは見えぬ舞の袖
天人もはだかにされて地もの也
いつとても木遣りの聲は如才なし
身の伊達に下女が髪迄結て遣り
菅笠の邪魔に成まで遊び過
片袖を足すふり袖は人のもの
お初にと斗しうとめたてにとり
銅杓子かしてのろまにして返し

七種をむすめは一つ打て逃げ
赤とんぼ空を流るゝ龍田川
紅葉見の鬼にならねばかへられす
お内義の手を見覺えるぬいはく屋
泣がけも尊氏已後は最うくはず
しばらくの聲なかりせば非業の死
いせ島の内はゑんまを尊とがり
めつかちは大じ旨はむごくする
女房が有るで魔をさす肥立ぎわ
鑓持はむねのあたりをさし通し
白魚の子にまよふ頃角田川
帶解は濃おしろいのぬりはじめ
灯籠に甚だくらい言譯し
逆ヵ王を貰ひに出たる料理人
花守の生れがはりか奥家老
あかつきの枕にたらぬかるた箱
出てうしやうなんじ元來みかん籠
三箇國にたまつた用の渡りそめ
鼻紙で手をふく内義酒もなり
病上りいたゞく事がくせになり

まんぢうに成るは作者も知らぬ智恵
取揚婆屏風を出ると取まかれ
しかつてもあつたら禿炭を喰ひ
水茶屋へ來ては輪を吹日をくらし
ふんどしに棒つきのいる佐渡の山
主の縁一世へらして相續し
親ゆゑにまよふては出ぬ物狂ひ
能事を言へば二度び寄付ず
初會には道草を喰ふ上草履
喰つぶすやつに限つて齒をみがき
子が出來て川の字形りに寢る夫婦
取次に出る顔の無いすゝはらひ
煮うり屋の柱は馬に喰れけり
りやう治場で聞けば此頃おれに化
足洗ふ湯も水に成る旅戻り
まゝ事の世帶くづしがあまへて來
朝めしを母の後ろへ喰ひに出る
辨天の貝とはしやれたみやげもの
四辻へ來ると追人の氣がふえる
降參の顔をなぐさむ白拍子

山のいもうなぎに化る法事をし
五つ月を越すと近所へぎりをかき
白いのに其後あはぬ寒念佛
返事書く筆のじくにて王を逃げ
嬉しい日母はたすきでかしこまり
袂から口ばしを出す拂もの
醫者の門ほと〳〵打つはたゞの用
稻妻の崩れよふにも出來不出來
張ものを上手にくゞる高足駄
夜が明けて狩場々々へ外科を呼び
恐悅を水としきみで申上げ
こそぐつてはやくうけとる遠目鏡
大黑の好きは大根のぶん廻し
江の島で一日雇ふ大職冠
上げ輿の當てにして置く地主の子
鰒買て餘所のながしへ持てゆき
女房は蚊屋を限りの殺生し
針仕事手のかるく成ほとゝぎす
物もふといはるゝ迄に成あふせ
樽ひろひあやうい戀の邪魔をする

御りんきのもう一と足で玄關迄
きめ所をきめた貳百はしやちこばり
言ひ出して大事の娘寄つかず
家老とは火をする顏の美しさ
店先へきつかけの有るうたが來る
藪入はたつた三日が口につき
かみさまと取揚婆が言ひはじめ
奥さまの加勢立臼なべのふた
腰繩の氣で母おやは苧をあづけ
ふがいない魂二つ番がつき
月ふけて下戸の哀はひだるがり
笑ふにも座頭の妻は向きを見て
のびをする手に腰元はついと逃げ
圍はれの何を聞くやら陽陰師
ゆび切るも實は苦肉のはかりごと
十分一取におろかな舌はなし
ぶらつくを棹でまねいだ渡し守
棒の中めんぼくもなく醉は醒め
手付にて最う神木とうやまはれ
上下は我儘に着るものでなし

勘當をゆるすと菜を喰ひたがり
奥家老顔をしかめるものをふみ
寐て居ても團扇のうごく親心
すゝ掃の孔明は子を抱いて居る
松の内七つの星を能くおぼへ
見附からわさびおろしが出て呵り
大磯の落馬はすぐにたばこにし
唐人を入り込にせぬ地ごくの繪
日和見のみそげて傘を下て出る
丸山でかゝとの無いもまれに產み
きのじ屋は階子の口で人はらひ
法の聲受狀迄に行きとゞき
黑札の禮には馬鹿な顔で來る
藪入が來て母おやは遣り手めき
家持の次に竝ぶが論語よみ
霜月の朔日丸は茶屋でのみ
新造のやつかいにする鼠の子
棧敷から人をきたないものに見る
藪入の内母おやは盆で喰ひ
やく拂出しなに一つやつて見る

丸藥を貰ふ座頭はちゞこまり
霍亂もどふか祭のばちあたり
伊豆ぶしも八代迄はだしがきゝ
半分はしきせで拜むゑんま堂
盆山は欠落らしい人ばかり
江の島へ硫黃の匂ふはけついで
棧敷から出ると男を先へたて
人の物たゞ遣るにさへ上手下手
能いむすめ年貢すまして旅へ立
藥の苦せない親仁は喧嘩の苦
屋かたから猪牙へ戀路のはしけもの
岩茸はぞんざいに喰ふものでなし
紫屋是も同じくうそッつき
春迄はふみこんで置く女ぶり
吉治が荷おろせば馬はかいて見る
萬歲の口ほどつゞみはたらかず
ごとくなる刀をぬいてせめる戀
小便に起て夜なべをねめ廻し
しうとめと違ひ舅のいじりやう
あいぼれは顔へ格子の跡が付き

辻地藏山師仲間へ抱こまれ
目合ひ見てそつといふ程高く請
供船へお玉の類はゑり出され
耻かしさ知つて女の苦のはじめ
男じやといはれた疵が雪を知り
川止めの間太夫も麥をつき
夜そば切立聞をして三聲よび
草履取名殘の裏と聞かじり
兩介は第一めしがうまく喰へ
仲條は手斗出して水を打
壹軒の口上で濟むくばり餅
景清はお尋ものに能い男
綿つみはみかんの筋も肩へかけ
生醉はおどかすやうなおくびをし
ゑり元のうつとしそうな田舍馬
ふんどしをするが湯治のいとま乞
眞ッ黑な小刀遣ふ野老うり
蠟燭を消すに男の息をかり
太鼓直出來てから出す火打筥
船頭の女房能い日にせんたくし

猿田彦坂際に來てかぎ廻し
追出されましたと母へそつと言ひ
夕立の戸はいろ〳〵にたて〻見る
金持のくせに小粒にことをかき
松右衞門二言といはず酒をうけ
抱た子にた〻かせて見るほれた人
是切の小袖着て寢るたいこ持
網の目をくゞつてあるくよめの禮
くじ取て遣手が灸をすへて遣り
剃つた夜はゆふべの枕きたながり
あんどんは百と百との結び玉
いそがしくなると鹿島は襟へさし
いつちよく咲た所へ幕を打
病上り母を遣ふがくせに成り
五六町錢屋をた〻く戻り駕
是からは行斗じやと櫛はらひ
三人で三分なくなる智惠を出し
逃たときや男の中で夜を明し
腰元は寢に行く前に茶をはこび
三めぐりを溜め小べんの揚場にし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com